

トーマス・マンの現実認識の方法について

小林 英 信

自己を認識すれば、何人も呉下の旧阿蒙たらず。

トーマス・マン、『略伝』より¹⁾

1

トーマス・マンの『非政治的人間の考察』（以下『考察』と略称）から『ドイツ共和国について』（以下『共和国』と略称）にかけての思想的变化については、不十分ながら既に論じたことがある。その変化は簡潔に言うと、プロシヤ的君主制論者からデモクラシー的共和制論者への変化であった。²⁾

当時のドイツ国民は彼のこのような変化を変節と捉え非難している。『共和国』の講演中に、すでに聴衆はしきりに野次を飛ばしたり、床を踏み鳴らしたりして、彼の豹変ぶりに抗議している。もちろん、マスコミもそれを取りあげ、強くトーマス・マンを批判しているが、ここではそのうちのひとつ、翌日の『Der Tag』誌にのったF・フスゾングの『サウロ・マン』について瞥見しておこう。

四年前には文明の文学者、平和主義者、政治、民主主義者、共和主義者に反対する浩瀚な本を著わし、その本を通じて、ドイツの知性がそれまでに語ることができた戦争体験および戦争の打撃についての論のうちで最も本質的なことを述べた（中略）トーマス・マン——すなわち、コスモポリタンのサウロから愛国的パウロとなっていたトーマス・マンは、今晚ふたたびサウロという名前を名乗り出た。³⁾

サウロおよびパウロという名前についてはキリスト教に通じていない者でもよく知っている名前であり、敢えて説明するまでもないだろう。ただひと言付け加えておくと、サウロからパウロへの変貌が「昨日の敵は今日の友」⁴⁾ という肯定的な比喩の意味をもっていることからわかるように、その変貌は賞讃されるべき変貌であり、生長とも発展とも言うべき変貌である。再びパウロからサウロに変貌を遂げたトーマス・マンは、その意味か

1) Thomas Mann, *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*, S. Fischer Verlag 1974, Bd. 11, S. 129. (佐藤晃一訳)

2) 拙稿、『トーマス・マンのイデオロギー的発展における内面的連続性について』、アルテス・リベラレス（岩手大学教養部報告）第14号参照。

3) Friedrich Hussong, *Saulus Mann*, Der Tag, 15. Okt. 1922. (*Thomas Mann im Urteil seiner Zeit*, Herausgegeben von Klaus Schröter, Christian Wegner Verlag 1969, S. 100.)

4) 相良守峯編、『大独和辞典』、博友社、Saulus の項参照。

らすると、さしずめ変心した、あるいは変節したと言うべきであろう。

もちろんF・フスツングはそう言いたいのであるが、果して真実はどうであったのだろうか。

確かに『考察』におけるトーマス・マンのエキセントリックなまでの反デモクラシー的言辭と、『共和国』の末尾における「共和国万歳！」⁵⁾という叫びだけをとり出して比べると、彼の変貌ぶりは見事なものである。その限りにおいては、彼が変節したと言われても反論のしようがないであろう。

しかしそれは表面上のことであって、トーマス・マンの内面においては真実はどうであったのだろうか。前稿ではこの点に焦点をあて、彼の内面における変化について詳しく見た。その結果得られた結論は、トーマス・マンの『考察』から『共和国』にかけての思想的变化は、変節と呼ぶには余りにも内面的に連続したものであったということである。少なくとも、変節が何ら内面的必然性もなく、ただ自己の社会的、経済的立場を有利にするために自己の思想信条を変えるというのであれば、トーマス・マンの変化は決してそのような変節ではない。いま一度、前稿の要旨を内面的連続性という点に絞って述べてみよう。

まず『考察』についてだが、トーマス・マンはそのなかで次のように述べる。

彼（文明の文学者）はある発展を望み、それを押し進めている。——いわたくしもその発展が必要だと思ひ、不可避だと思つてゐる。すなわち、自分でも又自分の資質に応じ、心ならずもであるが、ある程度はその発展に参与してきた。しかし、だからといって、声高にその発展を声援すべき理由がわたくしにはわからないのである。⁶⁾

この言葉は、この浩瀚な書物の細かく錯綜した議論を別とすれば、そこにおけるトーマス・マンの基本的な考え方を述べるものと考えられる。トーマス・マンは当時、心の奥深い所ではこのように考えていたのだろう。

ところで、そこで述べられている「ある発展」が「ドイツの政治化、文学化、知性化、急進化」⁷⁾を指して言うものであり、ひと言で言うと「ドイツのデモクラシー化」⁸⁾であることは、この『考察』を一読した者であれば誰も異論を唱えないだろう。F・フスツングも指摘しているように、数多くある反デモクラシーの書のなかで、もっとも本質的なことを述べたこの『考察』のなかに、このような「ドイツのデモクラシー化」を容認するよう

5) Ebenda, S. 852.

6) Th. Mann, G. W., Bd. 12, S. 67.

7) Ebenda, S. 68.

8) Ebenda, S. 68.

な言葉がみられるのは大変な驚きであり、注目すべきことである。特に「自分でも又自分の資質に応じ、心ならずもであるが、ある程度はその発展に参与してきた」という言葉は、『共和国』におけるトーマス・マンの変身ぶり考える時、決して見過ごすことのできない言葉である。

トーマス・マンはさらに別の所で「われわれは、必ずしも自分の存在に合致した思想を抱く必要はない」⁹⁾とやや居直って述べているが、これらの言葉を総合して推察すると、要するに、当時のトーマス・マンは自己の内面に巢食う矛盾を十分に自覚していたと思われる。すなわち、『ヴェニスに死す』の主人公アッシェンバハの人間の崩壊をみてもわかるように、一方ではドイツ的＝プロシヤ的「心的態度 (Haltung)」¹⁰⁾が非人間的なまでに禁欲的であり、それ故に常に崩壊の危機にさらされているといった意味のことを作品で描いておりながら、その他方で『考察』において、ドイツ的＝プロシヤ的の価値観、たとえばその反政治性、貴族性、要するに反デモクラシー的傾向を執拗に擁護するという矛盾をよく承知していたのである。

このように矛盾を十分自覚していたにもかかわらず、トーマス・マンがあゝまで一方的にドイツの反デモクラシー的傾向を主張したのは、何らかの理由があったからに違いない。いくつかの理由が考えられるが、少なくとも言えることは、戦争という何事においても曖昧な態度を許さない異常な出来事が彼に大きな影響を与えたということである。

さきほども少し述べたが、当時のトーマス・マンは矛盾せる状態、すなわちルカーチの言葉を借りると「プロシヤ的なものに対する作家としての批判とそれらのものに対する人間的・政治的愛着」¹¹⁾を併せ持つというパラドキシカルな状態にあった。それが第一次世界大戦という政治的のみならず精神的にも異常な状況が生まれ、その状況がトーマス・マンに態度決定を迫った時、彼は敢えてプロシヤ的なものに対する「人間的・政治的愛着」の方を選んだまでである。決してトーマス・マンは片方の「プロシヤ的なものに対する作家としての批判」を忘れてしまった訳ではない。従って、トーマス・マンが『考察』においてどのような激しい反デモクラシー的言辭を吐いている時でも、彼はその背後で常にプロシヤ的なものに対する批判すなわちドイツのデモクラシー化を意識していたのである。その証拠として『考察』のなかの次のような言葉をあげておこう。

講演者は、ある事柄の「一面」を強く擁護しながらも、同時にその事柄の「他面」を心ひそかに確信していれば、それだけいっそう決定的に強くその「一面」を擁護することができ

9) Ebenda, S. 131. (前田敬作・山口知三訳)

10) Georg Lukács, *Thomas Mann*, Aufbau Verlag 1953, S. 21.

11) Ebenda, S. 23.

るものだが……¹²⁾

次に『考察』と正反対の思想的立場にある、一般にそのように受け取られた『共和国』についてだが、その講演のなかでトーマス・マンは繰り返し次のことを強調する。

共和国はそのもっとも悪意ある敵対者から見てもそのような内的な真実である。¹³⁾

『考察』を注意深く読み、先に引用した言葉をよく知っている者であれば、この言葉から何ら唐突な感じも受けないであろう。むしろ、表現は変っているものの、この言葉は『考察』における言葉と同じ認識を述べるものと考えられるのである。トーマス・マンはこの「内的事実としての共和国」¹⁴⁾に対しては次のような態度で対すべきであるという。

共和国は一つの運命であり、しかもそれに対しては「運命愛」こそ唯一の正しい態度であるような運命である。¹⁵⁾

このような共和国支持者、すなわち情熱的に共和国を愛するのではなく、覚めた理性でもって運命として共和国を受け容れる共和国支持者のことをピーター・ゲイは「理性的共和主義」¹⁶⁾と呼ぶ。彼らは「共和主義本位の知識人」¹⁷⁾がその理性をあらゆることに対する批判に役立たせようとしたのに対して、その理性を和解のために役立てようとした。

彼らは階級と階級との和解、政党と国家との和解、ドイツと他の世界との和解、そして自分と共和主義との和解をはかろうとした。¹⁸⁾

もう一点この講演で注目すべきことがある。それはデモクラシーないし共和国とドイツ・ロマン主義が、そしてW・ホイットマンとノヴァーリスが関係づけられているということである。

トーマス・マンがこの講演で目的としたことは、「必要なぎり諸君（青年および市民）を共和国のために獲得することであり、デモクラシーと呼ばれているもののために獲得す

12) Th. Mann, G.W., Bd. 12, S. 85.

13) Th. Mann, G.W., Bd. 11, S. 824. (森川俊夫訳, 以下同じ。)

14) Ebenda, S. 824.

15) Ebenda, S. 822.

16) ピーター・ゲイ, 『ワイマール文化』, みすず書房, 41頁。(到津十三男訳)

17) 同掲書, 47頁。

18) 同掲書, 47頁。

る』¹⁹⁾ということであった。言いかえれば、「デモクラシー、共和国というものを、驚き迷っている民衆同胞にもなるほどと首肯させる』²⁰⁾ということであった。この目的は、いま見たピーター・ゲイの「理性的共和主義者」の社会的役割からすれば、何ら格別目新しいことでもない。しかし、驚かされるのは、トーマス・マンはその目的を遂行するのに、ドイツ・ロマン派のなかにあつて主知主義的傾向を強くもつ初期ロマン派の旗手ノヴァーリスをさかんに援用し、さらにそのノヴァーリスとアメリカン・デモクラシーの精神の高らかな歌い手であるW・ホイットマンとを結びつけているということである。先の目的が第一の目的だとすれば、この両者の結合は第二の目的と言えよう。

デモクラシー、すなわち共和国が水準に達しうること、ドイツ・ロマン主義の水準に達しうることを証明すために、私はこの演壇に立ったのであります。²¹⁾

要するに、この講演でわれわれが注目しなければならないことは、トーマス・マンがデモクラシーないし共和国を擁護し支持しようとしていることもさることながら、そのためにデモクラシーとドイツ・ロマン主義、あるいはホイットマンとノヴァーリスという一見全く結びつきそうもないものを結びつけているという事実である。その結合がどのような論理でなされ、またその論理がどの程度客観的かつ正当なものであるかということは二の次である。冒頭でみたように、サウロ・マンに逆戻りしたとされた『共和国』のなかで、トーマス・マンはこのような大胆な結合を行っているのである。いぜんとしてトーマス・マンの関心事はドイツの伝統的市民文化であり、それに対する愛着は決して断ち切れていない。外に向つては勇ましく「共和国万歳！」と叫んでいるものの、内面において相も変わらずドイツ的なもの、プロンヤ的なものの蘇生という問題が渦巻いていたのである。極端に言えば、そのための社会的条件として、たまたま新生なつたドイツ共和国の方がかつての帝国主義的ドイツの信奉者よりもより適切であつたというだけのことも知れないのである。

これらの人々は（共和国の指導者）、わたしたちの言語の領域で活動し、諸君と同様、ドイツの伝統と思考法則のうちに庇護されているドイツの人間であります。²²⁾

以上みるように、『考察』から『共和国』にかけての思想的变化は内面的に連続してい

19) Ebenda, S. 819.

20) Ebenda, S. 832.

21) Ebenda, S. 836.

22) Ebenda, S. 826.

るものであった。ただ外面的に全く正反対の言葉を吐くような羽目に陥ったのは、おそらく彼を取り巻く社会の諸状況が急激にかつ根本的に変化し、その変化につられて彼の内面に巢食う矛盾の両面に対するアクセントの位置が少しずつずれていったためと考えられる。従って、トーマスマンの変化がいわゆる変節でないことは最早や言うまでもないことだろう。

II

一般にある者がどのような形をとり思想的に変化を遂げて行くかということは、その者がどのような方法で現実認識を行っているかということと非常に密接な関係にあるように思われる。前章で述べたような思想的变化を遂げたトーマス・マンは、では一体どのような方法で現実を認識していたのだろうか。

この問題については、様々なアプローチの仕方があると考えられる。本稿では、トーマス・マンの初期作品『トリスタン』（1903年）における人物関係、すなわち作中人物のシュピネルとクレターヤーン氏（以下氏と略称）はお互いに相手はどうみているか、またその両者を語り手はどのようにみているか、さらにそのような人物関係を通して作者トーマス・マンの現実認識の方法はどのように再構成されるかなどを検討することによって、この問題に答えてみたい。²³⁾

ところで、この作品においては、作者トーマス・マンは原則として「客観的視点」²⁴⁾という物語りの手法を用いている。その手法によると、一般に語り手はどの作中人物の心のなかにも入りこまず、あくまで物語の世界の外にいて、そこから作中人物の言葉や行動に対して客観的な描写を行うのである。言い換えれば、語り手は一切の私情や私見を差しはさまず、対象をありのままに眺め、描写するのである。しかし、この定義からすると、『トリスタン』の語り手は少々その領分を逸脱しているように思える。なぜなら、注23で述べた理由から本稿では取りあげないが、氏の妻であるガブリエレの心のなかに立ち入ろうとする気配をみせているし、なによりもシュピネルや氏の言動に対する外からの描写や注釈には、かなりの主観的な強調や誇張、さらには皮肉までが認められるからである。「原則として」と但し書きを付加したのはこの理由からである。

まず氏についてであるが、語り手は彼の外貌や言動について次のように描写する。

23) 正確に言えば、この作品の主人公は三人と考えられる。すなわち、彼らの他に氏の妻ガブリエレがいるが、彼女はいわば彼ら二人を結びつける触媒のような機能をもっており、本稿の目的、つまり作中人物の否定的人物関係を追究することから少し外れる。従って、本稿では考察の対象外とした。

24) L. T. ディキンソン、『文学研究法』、上野直蔵訳、南雲堂、62頁。

彼は消化が財布と同じく順境にある男のごとく、大声でぞんざいに、かつ機嫌よく話した。²⁵⁾

この「消化が財布と同じく順境にある男」という言葉が象徴的に示しているように、彼は大きな商社を経営する有能な商人として、さらに食欲の非常に旺盛な食通として設定されている。前者の特性についてはともかく、後者の特性については、語り手は肯定的であるとは言えない。既に上に引用した文の語調、すなわち健啖ぶりをあらわすのに「消化」という比喩的表現を使っていることとか、商売の順調さをあらわすのに「財布」という比喩的表現を使っていることなどからも窺えるかと思うが、むしろ語り手はこの特性に対しては否定的ですらあると言える。このことは、上に引用した文のすぐ後に出てくる語り手の描写をみるとなお一層はつきりするであろう。

一体彼は、どっさりよいものを飲み食いするのが好きで、料理にも酒にもほんとうによく通じているところを見せ、故郷の知人仲間で供せられる晩餐の話や、あるえりぬきの、ここでは誰も知らぬ御馳走の話なんぞをして、療養客たちを大いに興がらせた。そういう折、彼の眼は優しい色をたたえて細まるし、言葉には、何だか上顎と鼻にかかったような響が加わるし、同時にまた喉の奥で、軽くぐびぐびというような音が、それに伴うのであった。²⁶⁾

「料理にも酒にもほんとうによく通じている」ということからすれば、彼は食通である。すなわちその限りにおいては、彼は否定されているとは言えず、むしろ肯定されていると言える。しかし、「どっさりよいものを飲み食いするのが好きだ」ということになると、その肯定は少し疑わしくなる。なぜなら、食通であるということと、食欲が非常に旺盛であるということは、全く両立しないということもないであろうが、一般的には何かそぐわない感じを受けるからである。もっとはっきり言うと矛盾するすら言える。ちなみに、このような表現は一種の矛盾語法による表現と考えられる。それはともかく、この異和感ないし矛盾よって彼に対する肯定的な意味あいも帳消しにされてしまう。さらに「言葉には、何だか上顎と鼻にかかったような響が加わるし、同時にまた喉の奥で、軽くぐびぐびというような音が、それに伴う」という行になると、もうはっきりと語り手が氏を斜めから意地の悪い眼差で眺め、彼を否定的にみているということがわかる。

このような語り手の氏に対する手の込んだ、いわば間接的な揶揄による否定は、この作品のいたるところに散見される。例えば、二・三例を拾ってみると、氏は登場するたびに何はさておいてもまずコーヒーとバターパンを注文する。これは繰り返しによる強調で、

25) Th. Mann, G. W., Bd. 8, S. 222. (実吉捷郎訳、以下同じ。)

26) Ebenda, S. 222.

この繰り返しは否定的な調子を帯びてくる。また、その注文に対しては「彼はKの音を、のどのずっと奥のほうで出すし、また誰でも食欲をそそられずにはいられない調子で、『ボタパン』と発音する、一種のあざやかな癖を持っていた」²⁷⁾という皮肉な注釈が加えられるが、この注釈も氏の言動についていかにも客観的に描写しているかのようにみせて、実は、語り手の氏に対するかなり主観的な好みによる判定が下されているのである。

皮肉たっぷりな注釈ということで、もう一例をあげておくと、氏は「イギリス風の頬髯をたくわえ、身なりもすっかりイギリス風である」²⁸⁾とその外貌を描写されているが、これもその限りにおいては肯定的な意味合いを持っている。なぜなら、それは彼がいかに当時のステータス・シンボルであったイギリス紳士然としているか、すなわち、単に彼の身だしなみがいかに上品であるかということのみならず、いかに彼が上流階級に属しているかということを暗示するものであるからだ。しかし、これもまたそのように素直に受け取れない。なぜなら、この描写より前のところで、語り手は彼の英語を含む発言に対して皮肉な注釈を付け加えているからである。すなわち氏はある時病身の夫人に対して、次のように優しい言葉をかける。「ゆっくりお歩き、ガブリエレ、take care, いいかい。それから口を結んで」²⁹⁾。語り手はこの言葉のなかの「take care」の部分を取りあげ、それに対して「もっともクレーターヤーン氏がそれをドイツ語で云っても、差支えなかったということは、否みがたいのだが」³⁰⁾という注釈を付け加えている。この注釈によって、氏の優しさは一挙に吹き飛んでしまい、その瞬間彼は鼻もちならないイギリスかぶれ、俗物に転化してしまうのである。

以上みるように、語り手は矛盾語法による表現とか、繰り返しによる強調、あるいは皮肉がこめられた注釈などによって氏の存在を根底から否定しているように思われる。それが余りにも穿ち過ぎだと言うなら、もう少し表現を和らげて、語り手は氏の存在に対して深い疑いの念を抱いていると言い換えてよい。いずれにしても、語り手が氏を肯定的に見ていないことだけは確かなようである。

ところで、このような語り手の態度はシュペネルに対しても同じである。やはり語り手は彼の外貌および言動を揶揄ることによって、彼の存在を婉曲ではあるが、根底から否定しようとしている。例えば語り手は彼の面貌を次のように描写する。

三十をちょっと越した、骨格のたくましい、栗色がかった髪の男を、眼の前にうかべて見

27) Ebenda, S. 220.

28) Ebenda, S. 222.

29) Ebenda, S. 218.

30) Ebenda, S. 218.

るがいい。髪の毛は、こめかみのところがもう目立って白くなりかけているが、まるい白い、少しはれぼったい顔には、どこにも髯らしいものの痕さえ見えない。剃刀が当たっているのではない——それは誰がみてもわかるであろう。軟かい、ぼかしたような、少年めいた顔で、ただところどころに、ぼつぼつと小さなうぶ毛が生えているだけなのである。³¹⁾

こめかみのあたりが目立って白くなりかけているのに、顔立ちが全く童顔で、ところどころにうぶ毛すら生えているというシュ・ピネルの面貌のアンバランスさは、もうそれだけで語り手が彼のことを肯定的に見ていないのではないかと予想させる。この予想は次に見るような彼の仕事ぶりに対する揶揄的な描写をみれば、さらにはっきりするであろう。

なお彼が此一冊のよりほかに、まだ本を著していないというのは、どうしても変であった。なぜなら、彼は明らかにむきになって書いているからである。一日の大部分を、彼は物を書きながら自分の部屋で過しているし、また非常に沢山の手紙を——ほとんど毎日一通か二通づつ——郵便局へ持って行かせる。——ただそれでいて、彼のほうではごくたまにしか手紙を受け取らないというのは、奇妙な滑稽なこととして、目についた……³²⁾

明らかに語り手は、シュ・ピネルに対して一定の距離をおき、その距離から主として彼の否定的な側面にのみ焦点を合わせ、そして表面的にはあたかもそれを客観的に描写しているように見せかけながら、その実かなり一点のみを執拗に誇張して描いている。それらの描写を通して眼に見えてくるのは、語り手のシュ・ピネルに対する意地悪い否定的な眼差しだけである。氏と同様に、語り手はシュ・ピネルの存在に対しても深い疑いの念を抱いているのである。

以上の二人の人物に対する語り手の態度からおわかりのように、「客観的視点」の「客観」という言葉の意味は、この作品に関する限り、語り手が氏およびシュ・ピネルの心のなかに入って行かないという意味だけに限るべきで、この章の始めでも述べたように、決して語り手は彼らに対して価値中立的に対しているわけではない。

III

では、上にみたように語り手によってその存在を深く疑われ、さらに言えば根底から否定までされている氏とシュ・ピネルの両者は、お互いに相手をどうみているであろうか。

その前に、彼らの人物像をもう少し明きりとさせておこう。既に前章で述べた彼らの

31) Ebenda, S. 223.

32) Ebenda, S. 224.

外貌および言動に対する語り手の描写からでも、およそ彼らがどのような人物であるか想像はできるであろうが、それだけではやはり明確な人物像をうるには不十分である。この章では彼ら自身が述べた言葉を通して、彼らの人物像をさらにはっきりさせてみよう。

シュピネルはガブリエレ夫人に向って次のよう告白する。

「……私どもは——私や私の同類は無用な生き物でしたね。まあ、ごくわずかな仕合せな時を除けば、自分たちが無用だという自覚を、へとへとになって引きずっているわけですな。私どもは有益なことを嫌います。それは下等で醜いということを知っています……」³³⁾

「……私はその婦人を、通りすがりにちらっと眼で掠めただけで、ほんとうは見たのではないのですよ。しかし私の捕えたその人の淡い影だけで、充分私の空想は刺激されて、私は美しい姿を携えて帰ることができました。いや、実に美しい姿ですな」³⁴⁾

「何週間も、明るすぎる日がつづいたあとですから、この暗さは眼に快いですな。私は美しいものも賤しいものも、一様に押しつけがましい明らかなで照らす太陽が、やっと少し隠れてくれたことを、ありがたく思いますね」³⁵⁾

これらの言葉にある自分たちが社会的に無用であるということの自覚にとどまらず、攻撃的に社会的・現実的有用さを否定するということとか、美に対する異常なまでの敏感さ、さらには現実の醜悪な側面を容赦なく明るみに曝け出してしまう太陽に対する嫌悪感などから判断すると、いかにシュピネルが社会的無能力と病的なまでの神経の過敏さの故に無味乾燥な現実社会に生きられない、すなわち現実社会から疎外され孤立する唯美的・デカダンの芸術家であるかがよくわかるであろう。本稿では全く取り挙げないが、彼は熱烈なヴァーグナー主義者でもある。この一事をもってしても、いかに彼がそのような人物であるか推して知るべしである。

次に氏についてであるが、彼は妻の担当医から子供と共に再度サナトリウムを訪れ、妻ガブリエレを見舞っておいた方が望ましいという旨の電報を受けとる。それを受けて早速彼はサナトリウムにやってくるが、その時担当医に向って開口一番言う言葉は次のような言葉である。もちろん、その前に彼がコーヒーとバターパンを注文したことは言うまでもないことである。

33) Ebenda, S. 229.

34) Ebenda, S. 230.

35) Ebenda, S. 240.

「望ましい……望ましい……しかしその必要もあるもんですかい。わしはわしの金が大事なんだからね。あんた、この頃は不景気だし汽車賃は高いし、こんな一日がかりの旅行なぞせんでもすんだんじゃないかのう。これがまあ例えば肺だとも言うんなら、わしは何も言いますまいさ。ところが、ありがたいことに気管支なんだから……」³⁶⁾

いくら文面にそれを直接に示すような表現がないとはいえ、普通感覚を持った人間であれば、担当医から電報で、しかも子供まで連れてくるようにと連絡を受けた時、あゝ妻の身に何かがあったのだなと考えるべきであるが、氏にはそのような心の動きが全く見られない。のみならず、現に夫人が危篤に陥っているにもかかわらず、まだ肺病でなく気管支であると信じて疑わないような有様である。このように鈍感極まりない氏であるからこそ、担当医に向ってあのような妻の生命と金銭すなわち商売とを比較するような非人間的な言葉を敢えて吐くことができたのであろう。

これらのことや、前章でみた氏の外貌など考え併せると、いかに氏が教養のない、感受性の鈍い、本質的には非人間的ですらあるブルジョワ的俗物であるかがよくわかるであろう。

以上の叙述から、シュピネルおよび氏の人物像はかなりはっきりしたであろう。これらの人物像から明らかなように、両者は全く住む世界を異にし、人間的質を異にする対照的な人物である。従って、彼らがお互いに激しく否定し合ったとしても何ら不思議なことではない。その実、彼らは物語の最後の方で、一戦交じえることになる。そのきっかけになったのはシュピネルが氏宛に出した一通の手紙である。そのなかでシュピネルは氏のことを次のように述べる。

「貴下よ、すでに申し上げた通り、貴下は下賤な美食家、口のおごった土百姓です。元来ぶこつな体格で、しかもきわめて低い進化の階梯にある貴下は、富と安坐的生活法とによって、神経組織の急激な非歴史的な野蛮な麁顔に到達せられた……」³⁷⁾

「貴下よ、どうか次の告白を受け取って下さい——小生は貴下を憎みます。貴下と貴下の子息とを憎みます。生命それ自身を、貴下の表わしておられる、俗悪にしてわらうべき、しかも勝ち誇った生命を、美の永久の相反であり、不倶戴天の仇敵である生命を憎むと同じように。小生は貴下を軽蔑するとは、あえて言いません。それは小生にはできません。小生は正直です。貴下の方が強者なのです。小生が闘争の際貴下に対して振り得るものは、ただ一つしかありません。弱者の崇高な武器であり、復讐の具であるもの、すなわち精神と言語だけです……」³⁸⁾

36) Ebenda, S. 249.

37) Ebenda, S. 253.

38) Ebenda, S. 254—5.

「下賤な美食家、口のおごった土百姓」という矛盾語法による表現は、まるで前章でみた語り手の氏に対する言葉を聞いているかのような気がする。語り手も氏のことを食欲の旺盛な食通と述べていた。この点に関する限り、語り手とシュピネルの氏に対する見方は共通していると言えよう。しかし、両者の否定の強さは全く異なっており、はるかにシュピネルの方が直接的で激しい。シュピネルから見れば氏の存在など「きわめて低い進化の階梯にある」存在にしか過ぎず、その神経組織も全く廃顔し切ったものに過ぎない。シュピネルによると、氏のこれらのネガティブな特性は単に氏の特性のみならず、一般に生命（Leben）そのものに共通してみられる特性でもあるが、そのような生命をシュピネルが憎悪するのは、他でもないそれが美に永久に反しているからであり、美の不倶戴天の敵であるからである。このような生命に対する見方、あるいは論理の展開の仕方は唯美的にしかつデカダンの芸術家であるシュピネルならではのことである。

ここでひとつ注意しておきたいことがある。それはシュピネルが僅かながら自己反省の能力を持っているということである。彼は氏を憎むことはできるが、軽蔑することはできないとか、さらにその能力を最もよく説明する「貴下が強者なのです」ということまで告白する。おそらくこのよな言葉は、彼が自己反省の力によって自己を離れ、氏の優れた面を少しは認識することができたことによって可能となったのであろう。

すなわち、いまみたように氏はシュピネルによって否定的にみられているが、そのような氏と言えど、シュピネルの視点から離れ、客観的に偏見なくみれば、現実社会に確かな存在根拠を持ち、大商社をきりまわしている、いわゆる豪商である。シュピネルに対する反論のところで、氏自身も自慢しているように、彼の名義だけで多額の融資が受けられるような社会的に信用の厚い人間でもある。いわゆるシュピネルの言葉で言うと「強者」なのである。

しかし、このように氏は現実的に有能な人間であり、社会的に強者であるからこそ、かえってシュピネルに一層強く否定される人間となるのである。なぜなら、シュピネルにとって現実的・社会的領域は否定されるべき領域であるからだ。比喩的に言えば、氏はシュピネルからみればマイナスの領域におけるプラスの人間である。プラスがマイナスと掛け合わされると倍化されたマイナスとなるように、氏はシュピネルにとって倍加された否定を受ける人物ということになるのである。

いずれにしても、シュピネルの強烈な個性というフィルターを通して見たとき、氏は否定的な人物に映らざるを得ない。次に見ることになるが、このことは氏からシュピネルをみた場合も同じである。

ところで、この手紙を受け取った氏は、早速シュピネルの部屋に行って抗議する。シュ

ピネルに対して直接、口頭で抗議しているということは行動的な氏らしく、これも彼の人物像を理解する上で興味あることである。もっとも変っているといえば同じサナトリウムに居るのにわざわざ手紙を出すようなシュ・ピネルの方がはるかに変っているかもしれない。

その抗議のなかで、氏はシュ・ピネルに対して次のように言う。

「……わしが出かけてきたのはな、あんたがまず第一に阿呆者だということを知らせて上げるためだ——どうだな、それはもうあんた知っていそうなもんだが。しかしその次に、あんたは大の卑怯者だ……『美』というのがあんたのきまり文句だが、それは要するに、びくびくやこそそや焼き餅の異名にすぎんだ……」³⁹⁾

「……君のような人間には、法律で向うよりほかにしょうがないんだ。君は公安を害する人間だ。みんなを気がいにする奴だ……」⁴⁰⁾

「……わしは女子の顔を横眼でおずおず見るようなまねはせんぞ。ちゃんと見てやってだ、もし女がわしの気に入って、女のほうでもわしが好きだというなら、そうしたらわしはその女を妻にするまでのことだ……」⁴¹⁾

唯美的・デカダンの芸術家のシュ・ピネルも、現実主義的人間であり豪商でもある氏にかかったら、このようにも見えるのかと思うと、全く見事という他はない。冷静に距離を置いてみればポジティブでもあると考えられるシュ・ピネルの特性が、すっかり裏返しにされ、全くネガティブな特性として氏の眼に映っているのである。

すなわち、面白いのは、各々非常に個性の強い灰汁のある人物がお互いに対立する相手をどうみているか、いわば各々の眼に映った相手の人物像の奇抜さもさることながら、相手をどのようにみるかというその見方を通して、彼ら自身の人間性、すなわち物の考え方、感じ方が逆に浮き彫りにされているということである。たとえば氏はシュ・ピネルのことを「公安を害する人間」と呼んでいるが、唯美的・デカダンの芸術家であるシュ・ピネルをそのようしか見られないということを通して、氏の反美的、反芸術的特性をはっきりとうかがい知ることが出来るのである。

以上みるように『トリスタン』の主人公である二人は、お互いに相手を独断と偏見によって歪曲した結果であろうが、徹底して否定的に見ている。このことは当然と言えば当然

39) Ebenda, S. 257.

40) Ebenda, S. 259.

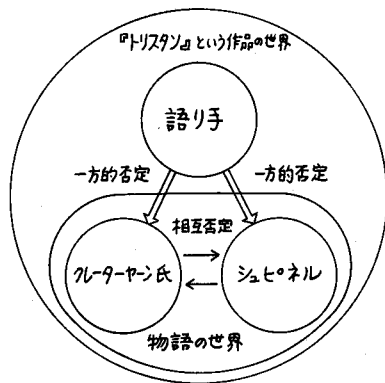
41) Ebenda, S. 259.

である。なぜならば、先にもみたように、彼らは全く人間的質を異にする対照的な人間であるからだ。人間的に共有する部分のない二人が出会えば、激しくぶつかり合い、否定し合うのは火をみるより明らかなことである。

Ⅳ

Ⅱ章とⅢ章で述べたことを簡単に要約すると、シュピネルと氏という『トリスタン』の主人公は、ともに一方で物語の外から語り手によってその存在を深く疑われ、別言すれば婉曲にはあるが根底から否定され、他方では物語のなかにおいて、お互いに相手を激しく否定し合っている。

このことからいろいろなことが導き出されるであろうが、ここでは次の二つのことを指摘しておきたい。一つは、シュピネルおよび氏のいずれでもよいが、一人の作中人物はもう一人の作中人物とさらに語り手という二方向からの否定をうけているということであり、もうひとつは、その一方の人物を否定する他方の人物も同じく二つの方向から否定をうけている、すなわち否定する他方の人物も背後において語り手から否定を受けているということである。(図参照)



ところで、このような否定的人物関係から、作者トーマス・マンの現実認識の仕方を抽出し、再構成することはできないだろうか。作品における人物の認識構造とその作者の現実認識の構造とは全く無縁であるようには思われないのである。

そこでまず、上にみた入り込んだ否定的人物関係を観点をかえ、読者の側からもう一度見直してみよう。作中人物を正確にかつ客観的に理解することは、読者にとってその作品を十分に理解し玩味する上で欠かすことのできない重要な作業である。

いま仮りに、論証の都合上、読者はシュピネルという人物に焦点を合わせ、彼を理解しようとしているとする。その場合、彼を眺める視点としては、少なくとも重要な視点としては三つある。上にのべた二方向からの否定ということから、すぐにも敵対する氏の視点と語り手の視点が考え付くであろう。その他にも一つ、奇異な感じを受けるかも知れないが、シュピネル自身の視点があるのである。

すなわち、読者はまずシュピネルという人物に同化し、シュピネルの言うことないし行うことを彼の内側から彼の意にそって理解しようとする。つまりシュピネルの言動に対

して、読者はさし当って善いとか悪い、あるいは正しいとか誤っているといった価値判断を下さず、ただひたすら彼の内側から彼をみて、彼のいわばポジティブな人物像をつくりあげようとするのである。

しかし、言うまでもなく、これだけではシュピネルの正確なかつ客観的な人物像を得るには不十分である。読者のそのような努力の結果得られたシュピネル像は必然的に一面的であり、扁平なものとならざるを得ないからである。シュピネルのふくらみのある立体的な人物像を得るには、読者はその他の人物がみたシュピネル像を知る必要がある。つまり、読者はシュピネルから離れ、他の人物に同化し、その人物の視点からシュピネルをみる必要があるのである。

そのような視点として、先にも述べたようにまず氏の視点がある。氏はシュピネルという人物をどのようにみているか。これは既にⅢ章で詳しくみた。敢えて繰り返すと、「君は公安を害する人間だ。みんなを気ちがいにする奴だ」という言葉を見てもわかるように、氏はシュピネルという人物を強く否定している。つまり、氏はシュピネルのネガティブな人物像を提示しているのである。この氏のネガティブな人物像を知ったとき、さきほどのシュピネルの側からみた彼のポジティブな像を知っている読者は大変驚くであろう。余りにも二つの人物像はかけ離れており、全く正反対であるからだ。この作品ではシュピネルは殆ど肯定的に描かれていないが、それでもその否定的表現を裏返して解釈すれば、シュピネルの内側から見た彼のポジティブな人物像が浮かび上がってくるはずである。それは何度も述べたように芸術的にも精神的にも非常にすぐれた能力をもつ人物、いわゆる肯定的にみた唯美的・デカタンの芸術家像であるが、その像が正に氏からみるとあのように否定的な像に見えるのである。ブルジョワの俗物である氏の考え方からすると、シュピネルの優れた特性である芸術的・精神的な能力こそ、正しく公安を害し、人の精神を乱すものになる危険な能力そのものということになるのである。

このように読者は、シュピネルから離れ、彼と敵対している氏の立場に立ち、氏の視点からシュピネルを見返すことによって、シュピネルの内側からみた彼の人物像とはまた違う人物像を得ることができるのであった。

しかし、読者のシュピネル理解がここで止まるものでないことは言うまでもないことである。すなわち、まだ語り手の視点からの両者に対する、ここではシュピネルに対する否定が残っているのである。この否定は読者からみてどのように解釈すべきであろうか。

この否定についても言えることは多くあると思われるが、ここでは次の一点だけを指摘しておきたい。つまりそれは、その視点からの否定が今見た氏の視点からの否定と次元も質も異なるということである。以前に掲げた図において、語り手を物語の世界の外に置いたのは、実はこのことを示したかったのである。それはともかく、両者の否定が次元も質

も異にするというのは、単に語り手が物語の外に位置するからという訳ではない。もちろん、そのことと大いに関係があるのだが、結論から先に言うと、語り手の視点が物語の世界を眺める視点として最も根元的な、その意味で絶対的な視点であるからだ。従って、その視点からの否定、すなわち語り手の否定も絶対的な否定ということになる。F・モーリャックはその著『小説家と作中人物』のなかで、作家を神にたとえ、彼を「神の模倣者」⁴²⁾とまで呼び、作家の作中人物に対する絶対的、超越的位置を認めている。『トリスタン』においては、語り手は作者トーマス・マンとかなり重なり合う部分も多く、いうならば語り手は作者トーマス・マンの代弁者とも言えなくないが、このことから語り手の物語の世界に対する絶対的位置は理解されるだろう。Ⅱ章で語り手は作中人物の存在に対して深い疑いの念を抱き、あるいはそれを根底から否定していると述べたが、その時使った「深い」とか「根底から」という言葉も、実はそのことを暗に示したかったのである。

いずれにせよ、語り手のそのような否定に比べると、作中人物の否定は相対的なものである。すなわち、氏の否定にしても、氏がシュピネルをあくまで激しく否定したのは、それは氏があのように美に対して全く理解力のないブルジョワ的俗物であったからで、もし氏がそのような人物でなかったら、シュピネルに対する氏の評価も異なったものであったかもしれないという条件付きの、いわば仮言的否定であるからである。

この両者の否定が質的に異なることは、さらに氏が例えば「公安を害する人間」といった明確で具体的なシュピネルの否定像を対置しているのに対して、語り手はそのような否定像を全く対置していないということからも推察できるであろう。語り手はただシュピネルの外貌のアンバランスをあげつらうとか、言動の奇怪さのみを拾い集め、それに対して斜めから皮肉な注釈を付け加えるだけであった。

ところで、この語り手の否定は読者のシュピネル理解に対してどのような影響を及ぼすであろうか。結論から言うと、読者はこの否定を認識することによって、氏に否定されるシュピネルも、さらにシュピネルを否定している当の氏に対しても、その存在を素朴に肯定したり、彼らの言葉を無批判に受け入れたりすることができなくなる。語り手の否定によって、明らかに読者と作中人物の間には批判的な距離が生じてくるのであった。ちなみに付言しておけば、この批判的距離こそトーマス・マンの創作原理であり、認識の原理でもあるイロニーの活躍する空間そのものである。⁴³⁾

それはともかく、このように氏は語り手の否定によって、その存在を根底から否定されることになるのであるが、では氏がシュピネルについて語る否定的な言葉はどれ一つとし

42) フランソワ・モーリャック、『小説家と作中人物』、川口篤訳、ダヴィッド社、7頁。

43) Reinhard Baumgart, *Das Ironische und die Ironie in den Werken Thomas Manns*, Carl Hanser Verlag 1966, S. 55 ff.

て全く信用のできない誤まったものということになるのであろうか。言うまでもなく、否である。なぜなら、読者はシュピネルの怪しい行為、すなわち本稿では取り挙げなかったが、シュピネルが氏の妻であるガブリエレを言葉巧みに誘惑し、彼女の関心を夫である氏や氏の息子アントンから奪い去り、さらには医者から固く禁じられているピアノの演奏まで彼女に無理強いをし、その結果彼女を死に追いやるということをよく知っているからである。すなわち、氏のシュピネルに対する否定的な言葉は、シュピネルの一つの客観的な側面をみごとに突いているのである。

では、このような矛盾、つまり一方において氏の存在を深く疑い、あるいは根底から否定しておきながら、その他方で氏の認識を是認するということの矛盾はどう止揚すべきだろうか。

これに対する答は既に言うまでもないであろう。ある人物の存在が、いいかえればその人物の物の考え方、感じ方、さらには生き方が深く疑問を持たれ、根底から否定されているからといって、その人物の言うことが全て間違っているということにはならない。むしろ現実においてはその逆である場合が多く、敵対し否定する人物の立場に立ち、その視点から物事を見返したとき、自分ではそれまで気づかなかったようなことが、思いがけず明らかになるようなことが多いのである。もちろん、それは独断とか偏見などではなく、妥当する範囲は一定の範囲に限られるかも知れないが、それも立派な一面の真理なのである。氏のシュピネルに対する言葉、「君は公安を害する人間だ」はシュピネルに敵対し彼を否定している氏ならではの言葉で、正にシュピネルについての一面の真理をのべる言葉である。このことからすれば、今のべた矛盾はそもそも始めから矛盾などでないのである。

最後に、シュピネルに対する語り手の否定に簡単に触れておくと、これは今シュピネルに同化し、彼を内側から理解しようとしている読者にとっては自己批判ないし否定という意味を持つだろう。シュピネルの存在と云えど絶対的に肯定されている訳ではないのである。読者はシュピネルにしても氏にしても語り手の否定によって、彼らとの間に批判的距離をおくことを迫られる。この批判的距離こそイロニーの活躍する空間であることは先にも少し触れたが、語り手の物語に対する本来の役割は、このような批判的距離をそれぞれの読者のなかに意識させることにあるといっても過言ではなからう。

以上見るように、『トリスタン』という作品においては一人の作中人物に対する読者の認識の仕方は重層化している。要約すれば、次のように言えるだろう。すなわち、読者は一方で一人の作中人物に対して、その存在そのものを深く疑い、根底から否定しながらも、その人物を内側からいわば肯定的に理解し認識しようとする。そしてその他方で、読者はこれまたその存在を深く疑い、根底から否定しているのであるが、さきの人物と敵対する人物の立場に立ち、その人物の視点からさきの人物を理解し認識しようとするのである。

この章の冒頭で、いま読者は作中人物の一人に同化しようとしていると述べたが、この意味から読者イコール作中人物の一人とすれば、上のことはもっと簡潔に表現できるであろう。すなわち、読者は一方で自己の存在を鋭く批判的に認識しながら、同時に自からが強く否定する敵の立場に立ち、その視点から自己をやはり鋭く批判的に認識しようとしているのである。

V

前章でみた一人の作中人物に対する認識の方法は、単に読者だけのものではなく、作者トーマス・マン自身のものでもあると言える。なぜなら、上にのべたような作中人物の否定的関係を作品化している作者であれば、少なくともその前段階において、一人の作中人物に対する認識を上のにのべたような方法で行っていると考えられるからである。そもそも、そのような前段階での認識なくして、上にのべたような人物の否定的関係が描けるはずはないのである。もうひとつ、そのような認識方法がトーマス・マンの認識方法でもあったとする理由がある。それは、正にそのような認識方法こそトーマス・マンの言うイロニーの認識方法に他ならないということである。トーマス・マンはイロニーについて次のように述べている。

イロニーとは、しかしつねに両方がわに対するイロニーである。それは生に対してと同様に精神に対してもむけられる。⁴⁴⁾

わたしの場合生のためになされる精神の自己否定の経験はイロニーとなった。⁴⁵⁾

イロニーは、美学用語で言うところの、アポロ的なものという芸術原理と同一視できるかもしれません。なぜならアポロは、つまりこの遠方に赴くものは、遠方の神であり、距離の神であり、客観性の神であり、イロニーの神——客観性はイロニーなのです——であり、そして叙事的芸術精神だからです。⁴⁶⁾

これらの言葉からイロニーの特性をいくつか抽出するとすれば、少なくとも距離性、否定性、客観性という三つの特性が抽出されるであろう。すなわち距離性とは、自己を含めた認識の対象との間に保つ批判的距離のことであり、また否定性とは、もちろん対象の否定を含むことは言うまでもないことだが、自己の一時的な否定によって敵の立場に立ち、

44) Th. Mann, G. W., Bd. 12, S. 573.

45) Ebenda, S. 25.

46) Th. Mann, G. W., Bd 11, S. 802. od., Bd. 10, S. 353. (野田倬訳)

敵の見解を彼らの内側から理解するということであり、さらに客観性とは、そのような認識行為の結果得られた対象についての認識の客観性、あるいは全体性のことである。これらのイロニーの諸特性をみただけでも、いかにそれらが本稿でみた否定的人物関係から抽出される認識の特性と合致するものであるか、よくわかりいただけると思う。

いずれにしても、現実社会におけるトーマス・マンは、そこにおいて次々と生起する諸事件に対して上へのべたような重層化した方法を自己の固有の認識方法としていたからこそ、I章で見たような『考察』から『共和国』にかけての劇的な変貌を、しかも内面的に連続した変貌を遂げることができたのである。E・ヒルシャーはこの変貌に対して積極的な評価を与え、次のように言う。「トーマス・マンはイロニーによって新しい価値と認識を得た。」⁴⁷⁾

最後に、本稿の論述に対する注釈を二つばかり付け加えておきたい。既にお気づきのことかも知れないが、ひとつは、当時のトーマス・マンの認識方法については、その頃に書かれたエッセイからでも再構成できなくはないということである。しかし、エッセイにおいては議論は余りに抽象的にすぎ、再構成されたものも余りイメージ豊かなものとならない。つまり、ここで『トリスタン』という作品を分析の対象とした理由は、そもそもトーマス・マンは小説家であり、彼の本質は無意識の層も含めて作品に現われていると考えたからである。

もうひとつは、『トリスタン』という作品は1903年の作であるが、本稿のI章で述べた思想上の変化は1918年を中心とするその前後七ないし八年間のことである。すなわち、両者の間には余りにも時間的ずれがあり、『トリスタン』における認識の方法を第一次大戦前後のころのトーマス・マンに適用するのは妥当ではないのではないかという疑問についてである。これも、彼の創作時期の区分として、第一次大戦までが初期とされていることとか、彼のイロニッシュな認識の方法がそのころまでは余り質的に変わっていないということなど考え伴せると、余り問題がないものと思われる。

47) Eberhard Hilscher, *Thomas Mann, Volk und Wissen* Volkseigner Verlag 1968, S. 219.